

ネブラスカ大学オマハ校の 大学図書館の動向

大学図書館運営課業務担当 南光 実希

筆者は、2015年10月10日から2016年3月28日までの約5ヶ月間（冬季休暇期間を除く）、本学が設けているグローバル人材開発プログラムの一環として、アメリカの中西部に位置するネブラスカ大学オマハ校で開講されている海外研修に参加した。この研修は、グローバル・ビジネスに対応できる能力を修得する、また、就業体験と調査・研究により海外の高等教育機関の管理運営に関する知識を修得するという2点を目的として組まれているプログラムであった。

研修内容については、最初の約4ヶ月はビジネス関連の研修（ビジネスコミュニケーショントレーニング、ビジネスコンセプト、異文化理解とネットワーキングの学習等）を受け、その後、約1ヶ月は就業体験で、研修で身につけた英語コミュニケーション力とビジネス知識を發揮し、海外の大学での管理運営・業務に関する知識を修得するというものであった。

ここでは、筆者がこの就業体験の期間中、実際に図書館を利用した際に学んだネブラスカ大学オマハ校の大学図書館事情、本学の大学図書館との差異、ネブラスカ大学の大学図書館職員にインタビューした学修支援の取組み、および、大学図書館の今後の在り方について検討すべきだと思われる事項の個人的見解という4項目を中心に紹介したい。

1. ネブラスカ大学オマハ校の大学図書館事情

ネブラスカ大学オマハ校には約15,500人の学生がおり、その内訳は学部生が約12,500人、大学院生が約3,000人となっている。また、資源・自然保護学/民族・

文化・ジェンダー研究/コミュニケーション学/コンピュータ学/教育学/工学/外国語・文学・言語学/法学/英語・英文学/図書館学/生命科学/数学・統計学/学際的研究/公園学・レジャー学・フィットネス学/哲学・宗教学/物理科学/科学技術/心理学/保安学/行政学/社会学/交通学/芸術・音楽・演劇/健康科学/ビジネス・経営・マーケティング学/歴史学等多くの学部が設けられている。

このことから大学図書館には、様々な分野の図書・資料が揃えられていた。幅広い専攻分野があるということはそれだけ選書も大変になることが容易に想像できる。そのため、選書方法について図書館職員に聞いてみたところ、具体的にはそれぞれの分野で8人のサブジェクトライブラリアン（特定の分野に精通した専門知識を保



ネブラスカ大学オマハ校

有している図書館職員)が選書しているとのことであった。また、その他にも利用者や学部からの希望も受け入れているとのことであった。

図書の蔵書数は冊子体で約 750,000 冊あり、更に買い切り型の電子ブックは約 570,000 冊が閲覧可能になっていた。これらに加えて DDA (Demand Driven Acquisition) を導入し、レンタル料を支払うことにより約 275,000 冊の電子ブックを閲覧することが可能になっている。もし、この方法で 3 回以上閲覧された場合は需要があると見なし、該当のタイトルを購入するという流れになっている。電子ブックの利用率について質問したが、膨大な数の電子ブックへのアクセスが可能なので、具体的には不明とのことであった。つまり、冊子体図書の蔵書数約 750,000 冊の図書館ではあるものの、それに加え、冊子体に匹敵する以上の数の電子ブックを提供しているということになる。

また、雑誌は約 20,000 タイトル弱の冊子体を所蔵しており、これに加え、100,396 タイトルの電子ジャーナルが閲覧可能な状態である。このように、雑誌も電子ジャーナルが冊子体の 5 倍も多く、電子ジャーナルのパッケージを購入するために、冊子体は年々減らしていく傾向があることがうかがえた。

予算に関しては、冊子体の論文、物理的な媒体、冊子体の雑誌に約 300,000 ドル、Demand Driven (需要主導) の電子ブックに約 300,000 ドル、そして、約 2,200,000 ドル弱をデータベースと電子ジャーナルに割り当てているとのことであった。図書館のスペースは限られており、また、デジタルネイティブである利用者が増加している昨今、冊子体より電子資料が重要視されるのは自然な流れであると感じる。このような時代背景から、もはや冊子体の図書・資料を収集して保存することは図書館の主たる役割ではなくなっていることを物語っている。

図書館で勤務している職員は約 40 人で、この他に学生スタッフも約 20 人ほどいるとのことであった。正規職員は修士号 (主に図書館学) 以上の学位を保有している人が多くおり、専門知識を有しているため、利用者の

ニーズにあった対応が可能になっていた。人員は直接雇用なので、人材のアウトソーシングはしていないとのことであった。学生スタッフには留学生を積極的に採用しており、それぞれの英語力に応じて割り当てる業務を決めていた。学生スタッフの雇用は図書館側にも学生側にもメリットがあると思われる。本学ではカウンター業務をアウトソーシングしたタイミングで学生スタッフの雇用をしなくなったという経緯があるが、図書館側と学生側双方にメリット (図書館側は多言語対応可能な人材を比較的安価で確保できる、学生側は働く機会と経験及び対価を得られるなど) のある関係が築ける何らかの運営方法を、再度、考察してみるのも良いのではないかと感じた。

2. ネブラスカ大学図書館と本学図書館との差異

筆者が実際にネブラスカ大学オマハ校の大学図書館を利用して感じた本学の図書館との 3 つの差異、「個人デバイス持参 (BYOD: Bring Your Own Device) 環境」、「設備関連」、「飲食ポリシー」を中心に考察する。

まず、個人デバイス持参環境について述べる。筆者はネブラスカ大学で研修を受けるにあたり、MacBook Air と iPad mini を持参したが、インターネット環境が整っていることに驚かされた。図書館内はもちろんのこと、キャンパス内であればどこでも Free Wi-Fi が使える環境になっており、認証を通さず (何の登録もせずに)



ネブラスカ大学図書館外観

容易にインターネットにアクセスすることができた。本学で Wi-Fi を利用したい場合は、事前に登録をする必要がある。セキュリティ面を重視するのであれば本学での方法は適切だと思うが、利便性の面から考えるとネブラスカ大学の環境の方が利用者の満足度は高いのではないかと考える。特に留学生のように、英語のネイティブスピーカーではない利用者にとっては、特別な手続きをしなくてもインターネットが利用できるというありがたい環境になっている。また、特筆すべきはコンセントの多さである。図書館内はどこの席に座ってもコンセントが近くにあり、バッテリーの心配をすることなく、デバイスを利用することができた。

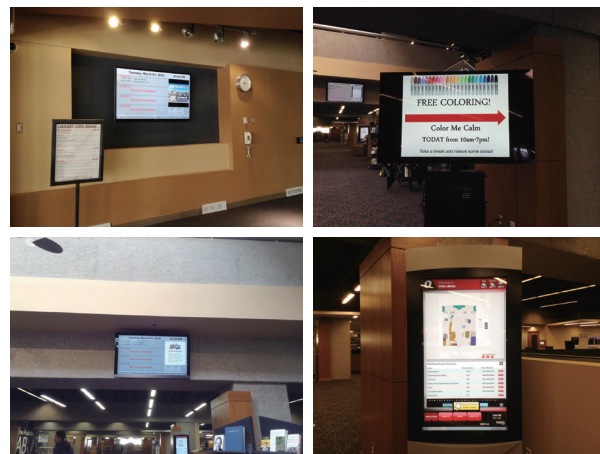


コンセント付座席や充電ステーションなどの館内の BYOD 環境

このように BYOD 環境が整っている背景には、学生の学習スタイルが関係していると思われる。多くの学生が自身のデバイスを持参しており、それを使用してノートテイクしたり、課題に取り組んだりしているため、デバイスの利用が必要不可欠なものになっている。そのため、大学側も利用者のニーズに合わせた環境を整えているのではないかと推測される。一方、本学では自身のデバイスを持参する学生はネブラスカ大学ほど多くはなく、学習スタイルも少し違いがあるように感じた。しかし、本学でも常設のデスクトップ PC を利用している学生は多く、今後、自身のデバイスを持参する学生も増えるのではないだろうか。本学でも 2016 年の夏、図書館内の特定のフロアにコンセントの増設工事を行うなど徐々に BYOD 環境の改善を行いつつある。

次に設備についてもネブラスカ大学が優れていると感じるところがあったので紹介したい。デジタルサイネージの活用、居心地の良い座席、グループ学習室の充実の 3 つである。

図書館の入り口にはまず、壁の左右にデジタルサイネージがあり、その日に館内で実施されるクラスのスケジュールが表示されていた。館内にも、イベント案内を表示しているデジタルサイネージがあった。またフロアマップも専用のタッチパネルがあり、現在地はもちろんのこと、探している場所を容易に特定できるので、わざわざ図書館職員に聞かなくてもよい環境が作られていて便利だと感じた。



デジタルサイネージの活用例

座席は、正規学生の約 11% にあたる約 1,700 席が用意されていた。昔ながらの木の椅子だけでなく、長時間滞在しやすいようなソファやグループでディスカッションするのに適した動かせる小さな机付きの椅子などが多数あり、個人の好みに合わせて選択することができる環境が整っていた。

グループ学習室は設備が整っており、利用人数に合わせて大小さまざまな個室が設けられていた。固定 PC およびそれに接続されている TV モニター (40 インチほどのもの) が用意されているので、プレゼンテーションの準備やグループワーク等をしやすい環境になっていた。図書館カウンターにて予約できたが、これらの個室は人気があったので土日でも予約がしばらく、利用率はかなり高いように感じた。



館内の学習環境

もう1点、飲食ポリシーの違いについても言及したい。本学では蓋付きの飲み物は許可しているが、食べ物は許可していない。しかし、ネブラスカ大学の図書館では飲食可であり、かつ、図書館内にスターバックスコーヒーの店舗が入っていた。飲食ができる環境になると、騒音、臭い、汚れなどのデメリットが発生することが予想されたが、実際は全く気にならず、マナーの悪い利用者を見かけることもなかった。ネブラスカ大学の図書館は2010年にリノベーションが行われ、現在のような環境になったが、以前は本学同様、食べ物禁止だったようである。飲食に関しては反対している図書館職員が少なからずいたが、当時の図書館長が主導し、トップダウン的に計画が実行されたとのことだった。結果、利用者数は増え、利用者の満足度もあがった様子なので、変革は成功と言えるのではないだろうか。当初、反対していた職員も完成後の環境に満足しているとのことであった。現状維持することも重要ではあるものの、利用者のニーズと時代の趨勢に合わせて、変革することも必要だと感じた。もちろん、新たな試みをする場合はリスクを避けるためのルール作りも考慮する必要があるのは言うまでもない。しかし、事前に全て把握することは難しいので、実際にやりながら改善を図るのもひとつの選択肢ではないだろうか。

3. ネブラスカ大学オマハ校の大学図書館での学修支援の取組み

1でサブジェクトライブラリアンについて少し触れたが、図書館のホームページ上に各分野別にサブジェクトライブラリアンのメールアドレスと電話番号が掲載されているため、利用者はメールや電話で質問したり、予約を取って直接、対面にて質問したりできるようになっていた。また同ページ内に、それぞれの分野別のリサーチガイドのリンクもあり、利用者個人で検索する際の手助けとなるよう作られていた。これに加え、過去にあった質問および回答も掲載されているので、基本的な疑問は解消できるように工夫されていた。

これらに加え、特筆すべきはチャット機能である。オンラインでリアルタイムに質問できる環境が整っており、わざわざ来館しなくても迅速に疑問を解消できるため、利用者の満足度は高いのではないかと思われる。本学でもメールでのサービスは提供しているが、チャットでのサービスは提供していないため、試しに利用してみた。チャットといえども少しは待たされることを予想していたにも関わらず、1分足らずで接続でき、職員からの反応があった。このようにチャットにて利用者から質問がきた場合、どのように回答しているのかを図書館職員に聞いてみた。その日にレファレンスカウンターで勤務しているアシスタントレベルの職員がまずは質問内容を確認し、即時回答ができるようであれば、そのまま対応する。しかし、即時回答が困難な場合は、質問内容に合わせて、その分野のサブジェクトライブラリアンに引き継ぐとのことであった。このことから、メールや電話同様、チャットにおいても信頼性の高い回答が得られることがわかる。

施設に関しては、ラーニング・コモンズと謳ってはいないものの、ラーニング・コモンズ的利用が可能な環境が地下のフロアにあった。簡単に机や椅子を移動させられるため、実際にグループワークをしている学生をよく見かけた。2階は Quiet Zone となっており、話すことが禁止されているが、その他のフロアは特に規制はないため、あちらこちらでグループワークをしている学生を目



多彩な機器が設置された Creative Lab

の当たりにした。

図書館内にはデスクトップ PC が設置された PC Zone もあったが、貸出可能端末が多いことにも驚いた。貸出用のノート PC は Windows および Mac を選択することができ、更には iPad、Kindle、Pro Cameras、レコーダーなど利用者が使いそうな機器が用意されていた。

特筆すべきは館内に設置された Creative Lab と呼ばれる施設である。ここでは 3D プリンターやレーザーカッティングなど特殊な機械が備えられており、利用者なら誰でも使用することができた。これらが図書館内にある必要があるのか疑問に思い、図書館職員に尋ねてみたところ、このような施設も教育のひとつのオプションだという回答があった。図書館は知識を得るために存在する場所であるため、資料やデータの提供に限らず、このような施設も併設しているとのことであった。確かに特定の学部にあるよりも図書館内にある方が利用者にとってより利便性が高いと思われる。

平日はもちろんのこと、休日でも図書館にわざわざ足を運んで勉強に励む学生の多さに驚かされたが、それはやはり学修環境が整備されているからこそだと感じた。

4. 大学図書館の今後の在り方についての検討

前述したとおり、冊子体より電子媒体が重要視され始めている時代背景が物語っているように、もはや冊子

体の図書・資料を収集して保存することは図書館の主たる役割ではなくなってきている。そのため、今後の図書館の在り方について検討する必要がある。

今回、ネブラスカ大学図書館を実際に利用したことで学んだ点が多くあり、本学の良い部分と足りない部分を知ることができただけでなく、今後のことを考える良い契機となった。利用者のニーズに合わせて、他大学と差別化できるような本学のオリジナリティが出せる改革ができることが理想ではあるが、そこに至るまでは試行錯誤を重ねていくことが現実的だと思われる。

例えば、チャットレファレンスの採用、日本語が堪能な留学生を中心に採用・教育することによる多言語レファレンス対応、学部・学年・人種・性別に関係なく参加できるイベントの開催、図書館をリノベーションする更なる施設の充実などが考えられる。

本学では図書館内でそれぞれの担当が分かれているので、ブレインストーミングすれば、より良いアイデアが出てくると思われる。その上で、実現可能性や費用対効果を考慮した対策を実行に移していき、利用者に満足してもらえる、より良い図書館になるよう全力を尽くしていきたい。



研修時の筆者

参考 URL :

●ネブラスカ大学オマハ校

<http://www.unomaha.edu/> (アクセス 2016/12/19)

●ネブラスカ大学オマハ校ビジネスコース (IPD)

<http://www.unomaha.edu/international-studies-and-programs/ipd/index.php> (アクセス 2016/12/19)

●ネブラスカ大学オマハ校図書館

<http://www.unomaha.edu/criss-library/> (アクセス 2016/12/19)